

は省かれたものと思うが、そうしたはるかな底流としての契機ぬきには、いかに自然主義的風潮に触発されてとは言え、柳虹の試作の史的必然性が弱まるのではあるまいか。「塵溜」は抱月の「現代の詩」に刺戟されて作られた、と書いている史書もあるくらいで、そうでないことは本書によって明らかだが、それならばなおのこと、新体詩らしいの底流が、十九歳の少年に「塵溜」を試作させたということになるであろう。柳虹の試作は孤村の訳詩の影響だとする日夏説が独断であることは、柳虹自身が強く否定していることでもある。

ともあれ、日本の詩におけることば——文語・口語の可能性——の問題は、単に時代的な慣習や形式の問題ではなくて、現代においても、もっと追究さるべき課題である、とわたくしは考える。それはもはや詩の形式論——美学をも超えた、詩の存在にかかわる本質論的な問題だからである。

また、ベイツンのことばをかりて言う、「詩の真実の歴史は、つぎつぎに詩が書かれて来た国語のなかに見られる変化の歴史」(『英詩と英国語』)でもあるのだが、まだ日本の詩はそこまでは問題にされた形跡はないようだ。

これらの意味からも、示唆にとむ本書の存在は、ただ詩や日本の近代文学に関心ある人びとにとつてだけでなく、ひろく日本語の変遷を思う人びとにとってさえも、今後無視できないものとなるであろう。

(昭森社刊・B6判・定価 五五〇円)

(立正女子短大助教授)

大久保典夫著『岩野泡鳴』

高 橋 春 雄

本書は、Ⅰ文学的人間像・Ⅱ伝記研究・Ⅲ作品研究その他・Ⅳ年譜の四部から成っているが、Ⅰ―Ⅲに収められた各章の発表年次等を示すと次のとおりである。

Ⅰ―思想と実生活(現代文学序説・昭38・6)・性格構造(明治大正文学研究・昭31・10)・方法意識(批評・昭33・11)Ⅱ―故郷淡路と泡鳴(同上・昭37・3)・青春の遍歴(同上・昭38・1)・詩人の出発(本書のための書き下ろし)Ⅲ―神秘的半歇主義(三省堂現代日本文学講座・評論隨筆1・昭37・10)・放浪(同上・小説2・昭37・1)・作家の死(文学者・昭38・7)

ことさらそれらを記したのは、比較的著者の身辺にいる者として、各章発表の事情を紹介することを妥当と考えたからでもあるが、実は著者の泡鳴への最初の取り組みが、まず泡鳴の「性格構造」に対してであったことに注目したかったためである。著者と泡鳴との出合いの回想から始められる、まさに冒頭にふさわしい「思想と実生活」にしても、「性格構造」が書かれてから七年の歳月を経た後のものである。しかも七年後に書かれたプロローグが、七年前に書かれたかのように安定しているのはなぜか。「かならずしも、彼の、わたしにおける意味を問いつづけてきたわけではなかった」と述懐するが、この著者は始めから泡鳴の「わたしにおける意味」を直観していたはずである。七年後に、転向を

契機としての泡鳴との邂逅を、「わたしの泡鳴解釈にとつての象徴的な事件」として想起したにはかならない。かつて古く、著者は秋声や透谷や草平の文学を遍歴していた。しかし転向の時点からは泡鳴に最も強い近親的共感を寄せてきた。泡鳴は著者にとつて、人生論的転成の軸であつた。著者の泡鳴研究の最初の出發が「性格構造」であつたことは、その意味で偶然ではない。「方法意識」以下のコースはそこからおのずから敷かれていたのである。

「性格構造」では露骨なまでにフロイトの心理学的了解の方法を援用しており、むしろ明解すぎるほど明晰な性格の分析が行なわれる。泡鳴著作の引用その他の傍証の適切さがいっそうそうした印象を強く与えるのであろうが、どだい、泡鳴との決定的な出会いを体験した著者にとつて、フロイトなど持ち出さなくともよかった。——泡鳴は最初から著者自身の内側で完全に了解されていた巨人であり、フロイトはたまたま文體を得るための借用物であるに過ぎなかつたのではないかと思われる。

そうした、既に了解されていた共感や愛情が、他の方便にもたれることからまったく独立してそのまま結晶したのが、実証的に精細をきわめた「伝記研究」や「年譜」であらう。前者では明治二八年、泡鳴が第一の妻竹腰幸と結ばれるまでを記述の対象としているが、川副国基氏も「泡鳴の初期伝記研究に画期的な基盤を築いている」（国文学・昭39・2）と称されているとおりで、特に实地踏査による洲本の少年時代の環境描写や父祖の家系の記述など、著者の独擅場の観がある。また、その「年譜」が、岩野薫氏

のそれを越えて、延享元年、初代岩野作兵衛が初めて蜂須賀家に仕出した年にまでさかのぼって記述されていることなども、著者が、この伝記研究の完成に、並々ならぬ努力を傾けていることを証すものといえよう。

それにしても、なぜ、転向の利那がいままた「美しい都会の夜景」と「泡鳴の巨大な影像」との二重像が、著者にとつて「生の象徴」を意味したのだろうか。著者は、「わたしの転向は、いつてみれば、借物の△思想▽と個体としての△わたし▽との乖離から生じたもので、当時のわたしに、思想即実生活の徹底した一元論者泡鳴が、圧倒的な理想像として映じた」と説明する。この瞬間、「転向」は著者にとつて、単に、象徴的な「死」からの回避を意味するだけのものではなくて、もっとアクティヴな実体として把握されていたに違いない。「借物の△思想▽」という「思想」が、果して「思想」であつたかどうかを反問さえせず、躊躇することなく「借物の△思想▽」と言いきることによって、むしろ転成した生の足場への「覚悟」をぶちまけたものではなかつたか。「実証への懐疑をもたぬ実証的研究ほど味気ないものはない」ともいう著者は、『岩野泡鳴』一卷を、創造的批評精神ともいふべき姿勢と、実証的科学精神ともいふべき姿勢との二律背反の緊張の中では書き難いだが、「思想」と「実生活」との二律背反の弥縫の中では綴らなかつた。ここで、例えば今年にはいつてからの村松剛氏の「歴史主義と文学」（文学界・昭39・1）という文章などを想起しながら述べれば、端的にいつて、『岩野泡鳴』一卷を貫ぬくモチーフは、マルクシズムという歴史主義からの生の救

谷 馨著「万葉東国紀行」

大 久 保 正

出という点にあるのではないか。「作家の死」で著者は、「わたしは、キリスト教からの離脱とマルクス主義からの転向を、アナロジカルなものとして捉えているが、これは、わたしの転向体験と泡鳴の離教の等質性が規範になっている」という。この章では、透谷・泡鳴・白鳥という、青年期にキリスト教に接触し、生涯なんらかの形でそれを意識せずにいらなかった三人の文学者の死を比較対照しているが、その中で泡鳴が、行間ににじむ愛情をこめて、生々主義者として一貫した泡鳴の死を讃美しているのは、泡鳴こそキリスト教という歴史主義から生を救出し、その生の回復を自己の終生のテーマとして一貫させた行為者であったと観ずる点にあるのだろう。

著者には、「転向文学論ノオト」に至るまで、数篇の転向文学論の労作があるが、これら一連の転向文学研究の主題も、転向を歴史主義からの切断として捉え、思想の相対化の契機を考える独自の発想によるものであって、その点に関する限り『岩野泡鳴』のモチーフとまったく等質のものではないかと思われる。もちろんこの著者のこうした発想の方法の規準は、この著者にのみ適用すべき規準であり、すべての他者の規準と重なりきるものでもなければ、またそうあってはならないはずのものであろうが、著者がそうした発想に従って更に広く近代文学の領域に亘り、そこに独自の整理を試みることは、大いに期待されてしかるべきではなからうか。

近時の万葉地理研究の進展は実に目覚ましい。万葉の風土から遠く離れた北辺の地に住むわたくしは、唯だ唯だあれよあれよと目を眩るばかりである。現に今わたくしの机上には谷馨氏の「万葉東国紀行」と並んで、今井福治郎氏の大著「房総万葉地理の研究」と、犬養孝氏の美しい写真の数々に飾られた「万葉の旅」上・中二冊が置かれている。犬養氏の「万葉の旅」は足跡全国にわたったもつとも広く、氏の情熱によつてはじめて生み出された、全国を踏破しての万葉地理書として、文庫版という制約にもかかわらず画期的なものと言わなければならない。これに比して、今井氏の著は房総という限られた地域を対象として、実地踏査と郷土文献の駆使を通じて精細知らざる無き研究を遂げたものとして、犬養氏の著とは対蹠的な意味においてこれまた空前のものと言ふ外ない。この二著に対して谷氏の高著は、関東を中心として陸奥などを除く万葉東歌のほぼ全域を対象とする実地踏査の成果であつて、扱った領域においては前二者のほぼ中間にあると言つてよいが、東国万葉地理を全般的に取扱つた纏まつた研究書としては、今井福治郎氏の前著「東国万葉紀行」(昭和二十二年刊、有精堂)に次ぐもので、曾て刊行され、本書に再録された「万葉武蔵野紀行」を始め、足柄や下野など従来踏査の余り及ばなかった地に足を運んで幾多の新しい開拓を示されている点で、やはり画